

留学生・日本人学生協働による方言劇作りの教育的可能性

柴田あづさ

(九州大学 大学院)

発表者は、関西の大学で日本語を教えていた交換留学生の多くが、日本語の共通語に加え、地域の言葉である神戸弁の習得も希望していると知ったことから、これを授業で取り扱う必要があると考えるようになった。しかし、方言は、その使用に個人差や世代差があり、また多くの場合、家族や同じ地域に住む友人、知人などしか使われないため、留学生とそういった関係にない教師が効果的にこれを指導することは容易なことではなかった。

考えた末、日本人大学生に1学期間、週に1時間半の日本語クラスにボランティアとして参加し、方言劇作りの活動を共に行うことでこれを指導してもらうことにした。その結果、学期末には留学生の神戸弁は目に見えて上達し、さらに、活動終了後には、これに参加した日本人学生らが留学生たちをサポートするためのサークルを発足させ、教室の外でも日常生活を含めた支援を行ってくれることとなった。

発表会の後に留学生に対して行ったインタビューでは、ほとんどの者が自身の神戸弁の上達を実感していると話し、これはももとの方言への高い関心に加え、日本人大学生が献身的に指導してくれたおかげであると述べた。また、大学内の国際交流が促進され、日本人による支援が恒久的なものとなった要因については、留学生たちが懸命に神戸弁の練習に励む姿が日本人には自分たちの輪に必死に入ろうとしているように感じ取られたこと、発表会で留学生の神戸弁の上達が観客に認められたことで両者の関係が強固なものとなったことの2点にあると思われる。